

秋祭ハ十二月二十日ト定メ数年間執行セシモ秋祭ハ年末切迫ノ故ニテ十二月九日ニ変更シ、次デ夏祭ハ梅雨ノ期節ナルヲ以テ八月二十五日ト改正ス。

一、社掌ハ今岳大権現ノ分社ノ關係上、香橋神社ノ社司之ヲ以テ充ツ。

秋祭礼ニハ神徒総代 議員 区長 其他有志四名ヲ参列セシメ祭典ヲ執行ス。

有志トハ一金五十円以上寄付シタル者、但シ物品ハ時価ニ応ジテ算定ス。

特別ノ功勞ト認ムル者。 寄付ハ同人一代トス。

資料② 《昭和十二年記 御殿立替工事》

起工昭和十一年 同拾貳年三月落成 藤川神社御殿立替工事費 金壹千四百貳拾円拾参銭也

村金支出五百八拾参円参十銭也 氏子篤志寄付金 合計壹百五十円也

区外寄付金貳拾円也山形宿分、拾五円也金石原区、拾円也提川、

残り六百四十四円五十三銭氏子ヨリ

委員 小松席吉 神社総代 吉村貞吉 井手藤次郎 区長 井手貞輔

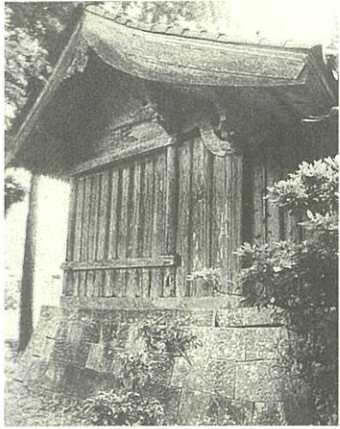
八、熊野神社（中野原総社） 中野原 中通

◎祭神 熊野速玉命 伊邪那岐 伊邪那美（岐美二神）

◎例祭 *夏祭 七月三十日 “権現さんの祇園祭”と呼ばれています。

*本祭 十二月十日

*そのほか田祈祷（さなぼり） 六月下旬



本殿外観



神社全景



茅葺屋根当時の拝殿

◎社殿 本殿は瓦葺流造

拝殿は瓦葺入母屋造

◇拝殿の屋根は平成十一年に従来の「かや葺き」から「瓦葺き」に改修されました。

◎由緒 創建はかなり古い年代と思われます。『享保四年（一七一九）奉再興』の棟札が現存しています。

（写真）

往時、紀州(和歌山県)の熊野速玉宮の御分霊を勧請し、いわゆる「熊野信仰の神社」として近郷の崇敬をあつめてきました。

熊野には熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の三社があり、昔から神仏習合思想の中で「熊野三山」と呼ばれて信仰は全国に広まり、「蟻の熊野詣」という言葉も生まれたほどで、今も各地から大勢の人々が訪れています。

◎奉納物 記念物等

*境内には古い石造物が数多く残されていて、本殿の裏には区内の各地から集められた数座の石祠が安置されています。(石造文化編)

*参道の入口に建つ「一の鳥居」は長い時代を経



三百歳の鳥居

て、造立年などの刻字は不鮮明ですが、「二の鳥居」には「権現社」と彫った社額が掲げてあり、柱には「宝永五子霜月吉日」の字が読めます。宝永五年(一七〇八)から現在まで三百年を越える歳月の風霜に耐えて長い歴史を見守ってきた、市内でも有数の古い現立鳥居です。

*燈籠は三対奉納されていて、参道入口から順に、文政六年(一八二三)、万延元年(一八六〇)、明治三十一年(一八九八)の建立です。

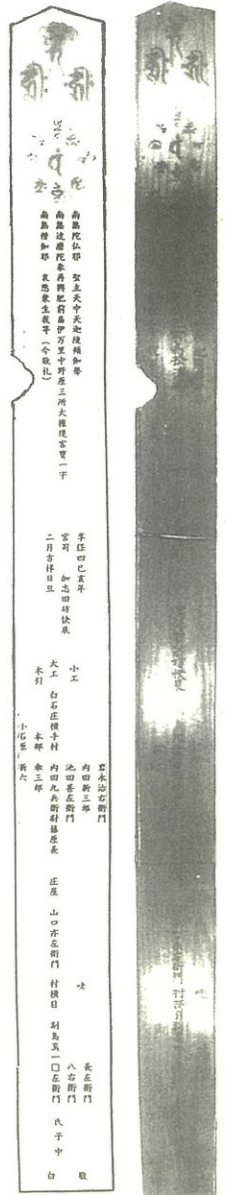
◇拝殿内には七掛の絵馬が奉納されていて、そのうち中央の大絵馬は色彩の剥落が甚大ですが、古社の面影を残しています。



拝殿中央の大絵馬

◇本祭り神事後の「直会献立」や「頭渡し」については「民俗編」に詳しく述べられています。

◆以上の神社のほか、松浦町内には数多くの神祠(小規模の社・堂)が鎮座されています。天照大神宮、天満宮、八幡宮、八天宮、山祇神、弁財天、猿田彦神、水神、山神、道祖神、金毘羅社、権現社 など【本誌 第六章 石造文化編 参照】



熊野神社棟札

間信仰は、倉稻魂神の別名の御食津神と三狐神（ケツネニキツネの古語）を結びつけたことからの信仰で、稲荷社には狐像があります。

これらの神々のお祭りを二月一日に一斉に各組で行い、参拝した後に宮所で酒食を共にする習わしが昔から続いています。

熊野権現神社の寄せ神群 上分から大川内町小石原に越す旧道の偽峠に、産土神の熊野権現社（偽峠権現社とも）がありました。地元の人たちが龍石と同様に、雨乞い祈願に浮立をして登った神社です。現在は明治末の無格社合祀の時に中通の熊野権現神社に合祀されています。合祀前の社は石造の祠だけあったのか木造の社殿まであったのか、古老に聞いても分かりませんでした。跡地には礎石や谷間に落ちた鳥居の破片などが残っていて、僅かに確認ができます。

同じ時、ほかにも熊野権現神社境内に寄せ神した、石祠が三基、神殿左側に並べて祭られています。

中央の石祠は、高さ約九〇センチ、幅が約四五センチで扉がついて中に「三王大権現」と刻まれ山神を祭る祠と思われます。右側面に「安永五〇〇卯月吉祥日」（一七七六年）、左側面に「施主山口又左衛門・同彦三郎」とあります。□の文字は風化して剥げ落ちて読めません。「刻字には振り仮名はない」

右側の石祠も扉がついていて、中に梵字が上に「**𑖀**」、下に「**𑖀𑖀**」二字横に並べてあって薬師三尊と思われる種子が刻まれ、右側面に「享保十二年□三月吉日中野原村」（一七二七年）と



上分の寄せ神（八天狗・山王権現・薬師三尊山神）

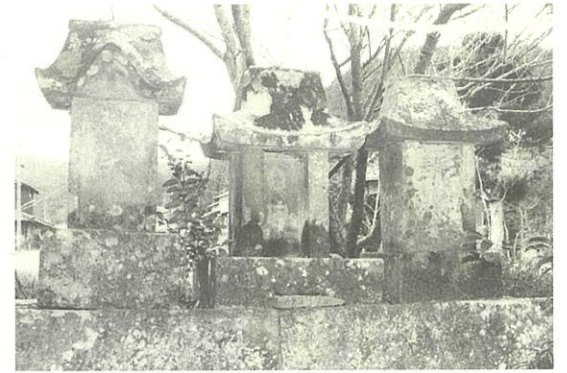
あります。神祠のように祭られていることから、薬師三尊を山神として祭った神仏習合の三尊山神ではないかと思われれます。

左側の石祠は扉はなく屋根石の載る竿石は、刻まれている文字がかなり風化剥離していますが「八天狗」と読まれ、右側面にある紀年銘も「文化十一年十二月□□□□」（一八一四年）と何とか読めました。天狗は神通力のある山伏姿の妖怪として知られていますが、日本古来の神の一つでもあります。八天狗は愛宕・比良・大山・大峰・鞍馬・飯綱・英彦山・白峰の八山に住む天狗で山岳信仰の山の神です。

上分では、昔から八天狗を祭って英彦さん山神社参拝のため、講仲間をつくり講立てをして路銀を貯めお参りしたものとされています。今でも「英彦山講」の名は残っていて、毎年九月に英彦山講仲間の親睦をはかる宴会が行われています。当時の人々が英彦山まで歩いた遠い旅の苦労が偲ばれます。

この三基の石祠は、神寄せ前に「三王権現」が原頭新堤のそばにある山王山に祠があった以外は祭られていた祠の場所は分かりません。

中通の寄せ神が、神殿の右側にあります。高さ六〇センチの石積み基礎の上に三基の石祠が祭られています。向かって右の祠の前面に「弁財天」両側に宝曆五亥天霜月十二月」（一七五五年）「山口



中通の寄せ神（弁財天・天満宮・八天宮）

又左衛門」と銘があるので、当時の庄屋山口又左衛門氏が建立されたものです。神寄せ以前の祭祀の場所は、中通の西方にある通称「べんじゃあさん」とも考えられますが定かではありません。中央の祠は、約三〇センチの長方形の石三個を立てて石屋根を載せた石殿に祭神の像が陽刻されています。側面には「文政十二年丑三月吉日」（一八二九年）と刻字があり、屋根の切妻のところに〇の中に梅の花が描いてあります。これは大宰府天満宮の神紋（一重梅鉢）と同じであり、神像の姿から菅原道真公を祭った天神さまと思われるます。

左の石祠は、高さ約一メートルの祠で竿石に「八天宮」、側面に「安政三年六月吉祥日」（一八五六年）台石に二十一人の氏名の銘があります。この八天宮は、もともと熊野神社の西方にあたる牟田原の小高い山頂にあったといわれています。例祭日は八月二三日で昭和二〇年代までは家々が団子をつくり、夜は村人総出で熊野権現さんに集まり、夜が更けるまで浮立で鉦や太鼓を打ち鳴らして賑わいました。

二、山野の仏さま

(1) 如来

お寺に行くときと本堂の中央の一際大きい須弥壇に「如来」さまが安置されているのを見ます。

紀元前五世紀から四世紀ごろ、北インドの小国シアークア（釈迦）族の王子として生まれた釈迦は、出家して菩提樹の下に座って瞑想を続け、ついに真理を悟って仏陀（如来）になったといわれます。

釈迦の入滅後は教えがさまざまに拡大されていき釈迦以外にも、阿弥陀如来・薬師如来・盧舎那仏・大日如来・弥勒菩薩などの如来が生まれ、人々の信仰をあつめました。

久良木の阿弥陀如来 久良木の中ほど、民家の裏山に地元の人が「あみださん」と呼んでいる石像があつて、木造のお堂の中に祭られてあります。基礎石の上に立てた方形の竿石に載せた蓮華座に、阿弥陀如来の坐像が置かれてあります。蓮華座からの像の高さは約五五センチあります。かなり古いものと思われ損耗がひどく、お頭も丸い自然石が代わりに載せてあります。

阿弥陀如来は、西方極楽浄土の中心をなす仏さまです。人々は死後には極楽に往生したいと願いますが自分の力で成仏できないとされる人も、念仏を唱えれば救われ極楽に導かれると言われる仏さまです。

久良木では、毎年夏には子どもたちが、阿弥陀さん祭りをしてお参りがなされます。

(4) おつかい―庄八さんのはなし―

あるとき、「隣い村に、つきやあに行たてくれんかの」と言われた小僧さんが、しぶしぶ行たてみらしたければ、見たこともなかと太かりっぱな家じゃったてたい。

そいぎ、小僧さんは帰ってから、「そりやあ まあ、おそろしか太とか家じゃった。おりやあんまい太とか家じゃけん、すぼって（小さくなつて）ひやったばい」ていわしたてたい。

そいば傍で聞いていた庄八さんが、「なんてまたあ、太とか家ないば、大手ば広げてゆうゆうとひやつてよかつたろうじゃ、ぜんなく（わざわざ）すぼってひやあらんてちゃー」ていわしたて。そいまで。

第八節 ふるさとの思い出

一、熊野神社夏祭りでの出来事

中野原 山口義美さんの語り

『四十一年新六月五日（旧五月五日）下村巡査引キ連レ、警察署ニ至レリ。警察署へニ夜宿シ、六月六日、佐賀監獄署ニ至ル。』……と

この事件の顛末について推測すると、

この事件は、多分明治四〇年の出来事で、八月三十一日の中野原熊野神社の祇園祭（夏祭り）で発生した事件であると思われます。当時、熊野神社の夏祭りと言へば、中野原村の一大行事として盛大に行われ、その上、村内では最後の祭りでしたので、近在近郊からの観衆も多く、それはそれは大賑わいの祇園祭でした。また、若者たちは振るまい酒に氣勢が上がり、境内のあちこちでは小競り合い等もつきものだったと言われています。

その夜は、催し物として「芝居」がかかっていました。舞台は常設の芝居小屋とは違って、幕間が長く、戦前まではサーベルをさげた巡査がよく祭りの場所に来て、監視と警備の任に当たっていました。巡査は、あまりに幕間が長いので、「早く幕をあけんとキルゾウ」と大声で叫びました。

これは、「早く幕を開けないと時間が切れるぞ！」と叫んだつもりでしたが、主催している若者は「切るとは何事だ！ 剣で切るのか！」と顔面蒼白になって興奮し、酒の勢いも手伝って暴れだ

しました。そして、境内に灯された明りをみんな消してしまい、
 巡査はあつという間に打ちのめされてしまいました。巡査を殴
 打した「割れ木」は、翌朝の現場検証で権現さん近くの農家か
 ら発見されたということです。

以上が事件の概要ですが、事件後、警察の厳しい取り調べが
 あつて、中野原は大混乱におち入りました。誰ひとりとして名
 乗るものがなく、捜査が行きづまっていた矢先、上分の某氏が
 ただ一人「わたしがやりました。」と名乗り出られたというこ
 とです。これまで不安と大混乱に陥っていた中野原の住民は、
 これで一件が落着し、平静の生活に戻ることができました。

その後、この某氏は一躍中野原のヒーローとなり、「ごんげ
 さん、ごんげんさん」と敬愛されたそうです。

—終りに—

この話は、祖母から少年の頃聞いていましたが、ある時祖父の雑種控え手帳を発見し、その裏付
 けがとれたので、「こんなこともあったんだなあ」と思いを新にして寄稿した次第です。

二、幻の大綱引き

山形 久保田満子さんの語らい

毎年、長い梅雨が明け、真夏の強い日射しに変わる頃は農作業も一通り終り、やがてお盆がやっ
 てきます。お盆には、地区最大のイベントである「大綱引き」が行われるから胸の高なりを覚えて
 いました。

そこで、当時の様子を探ってみることにいたします。

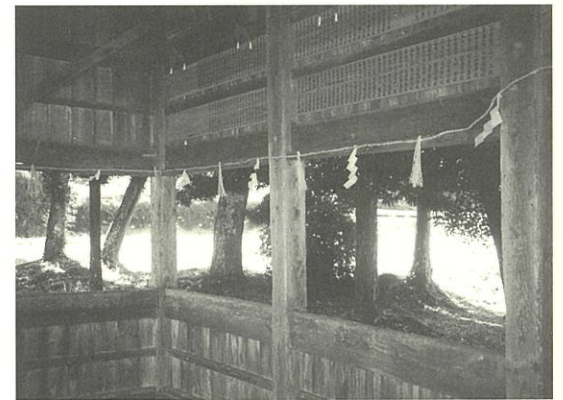
(1) 大綱づくり

大綱は、成人男子が綱をまたいで両足が地につかない程で、原料の藁は、山形、久良木の全戸か
 ら集められていました。直径二〇センチの「ニンギョウ」づくりは、婦人の仕事でした。このニンギョ
 ウを一〇本ばかり練り合わせたものが大綱に変身するのです。古い綱も半分位は利用されていたよ
 うです。

(2) 細縄づくり

大綱を直接握っても力をかけることはできないので、握れるくらいの細縄を作つて、それを大綱
 に取りつけ人力を集中して引き合うのです。

細縄は、観音堂（現存）から、真向いの高台にあった西念寺（昭和八年大坪町へ移転）のイチヨ
 ウの木までを折返す長さに作られ、約四百メートル位はあったものと思われれます。綱引きが終ると、
 観音堂の梁の上に保管されているのをよく見かけたものです。



昔日の面影が漂う熊野神社の拝殿

やちよつとした仕事は、ほとんど小若者の受け持ちでした。また、お日待ちの前日になると、もち米洗い、あんこ作り、宴会の準備等で大忙しでした。

当日は、日の出前に餅をつき、鏡餅にちぎって、残りは「あれつけ餅にしてみんなで食し、「うまか、うまか」と舌鼓をうったものです。その上、その日は仕事を休み、節句気分で酒食の小宴を催していたので、とても楽しい一日でした。

しかし、このようなお祭も、今ではいろいろな事情でその姿を殆んど見ることができないようになってしまいました。

十、神待ち

十月を「神無月」と呼んでいます。これは、諸国の神々が「出雲の国」に集り、どこの国も不在になるといふことから、このように言い伝えられたものと言われています。

町内では、ほとんどの地区が一月二九日か三〇日に、この「神待ち」を開催していましたが、今では青年宿もなく、このような習わしは少なくなっていました。しかし、一部の地区では、有志によって継承され、往時を偲ばせている所もあります。



藤川神社のいろり跡

当日は、境内のあまり風のあたらない適当な場所に、幔幕を張ったりして寒さをしのぎ、焚火で暖をとりながら、ひたすら神のお帰りを待って、酒を酌み交わしていました。地区によっては、神社の拝殿や床下に囲炉裏を作り、その跡が今も残されている所があります。

このことから、火を焚くということは、単に温まるだけではなく、一切のけがれを清めるという崇敬な村人の願いがこめられているように思われます。

また、長老の話では、「神様の御足洗い」や「お帰りなさい」のしぐさなど、興味深い話も多く聞かれます。

十一、熊野神社の本祭

- (1) 第一日目 本祭り 一二月二一日 第二日目 小祭り 一二日
(2) 祭り組と費用

祭り組は、上分八組、中通り五組、金石原四組で、当番の順序は、熊野神社のある中通りから始まり、上分、金石原へと巡回していましたが、現在は、中通と上分が二年毎に当番を回すように変



鏡餅を太陽に供える



本祭のなおり膳（手前がどじょう汁）

えられました。当番になった地区は、昔からの慣行に従って「宮座」を決定し当日にそなえるようになっていきます。

費用は、稗田の山口家から天保年間に寄進された田地の加地子米でまかなうことになっていますが、不足する場合は、地区から若干の補助がなされています。

(3) 祭りの当日

第一日目は、伊万里から神官を招き、厳かな神事が熊野神社で開催されます。

参列者は、宮総代、宮田寄進者、二地区の区長、宮座当番の祭組の人々で、神事後、参列者は当番の家に集って「直会なおり」となるしきりになっていきます。

直会におけるお膳は、昔から定まった料理をつくることになっています。特に「どじょう汁」は、是非つくらねばならないしきりであり、他に類を見ないものです。これは、熊野神社の神様の使いである「からす」の労をねぎらうという謂れにもつづいていきます。

このため祭組では、前日の一〇日までに「どじょう捕り」をして、当日にそなえなければいけません。

また、この席では、次回の当番区長に「神座祭帳の木箱」が手渡され、来年へ引き継ぐようになっていきます。

この木箱の中には、本祭りの規約や会計簿などが納められており、あまり古いものは見当らないようです。

「からすの労苦」にまつわる「どじょう汁」の風習、この風習が今も伝承されている意義は、実に貴重なものと考えられて今後も続けてほしいものです。

第二日目は、それぞれの祭組毎で「小祭り」が開催されます。

一年の無病息災に感謝し、豊作を喜び、神の恵みの有難さにふれるこの小祭は、町内の全域でも行われ賑っています。

十二、宮座の頭渡し

(1) 豊姫神社の頭渡し

宿分の豊姫神社では、「こっち方」と「あっち方」に分かれて、一年おきに「宮座」を交代し、氏神様のお祭りをするようになっていきます。両方三〇数戸の氏子で構成され、ほとんど同姓かその一族でしめられています。新しく氏子になった人もどちらかに所属されています。

どうして二組に分かれたのかは定かではありませんが、おそらく円滑に大祭を運営し、ふんいきを盛り上げ、迫力と厳粛さをもし出すためだのではないかと思われます。



どじょう取り（このごろは少なくなつた）